



学校だより



u k i f u n e

令和5年11月22日(木)
第31号 長文特集号①

〒979-2157
南相馬市小高区吉名字中坪1

TEL 0244-44-2023

ドクター國井 修氏の決意

國井修（くにいおさむ）氏（＊詳細は裏面参照）は医師で、公衆衛生を専門とし、世界の低所得国 130 カ国以上で感染症対策、母子保健、人道支援などの分野でグローバルヘルスに従事する世界を代表する一人です。彼とは以前ミャンマー在住中に知り合いとなり、一緒にカラオケをしたり、ソフトボールをしたりと、飾らない親しみ溢れる方でした。同じ時期に私の同僚として勤務していた当時 I 教諭はその後交流を続けており、先日、I 氏からこんな話（國井氏の著書のもと）を聞く機会がありました。今回は「長文特集号①」として少し長い文となりますが、お子さんと共に読みいただき、感想などお話しいただきたいと思います。

中学生になった時、「ばあちゃん」が胃癌の末期になった。両親が共働きだったので、他人なのだが、乳幼児の頃から預かってもらい、育ててもらった。いわゆる乳母である。（中略）そんなばあちゃんが入院した。中学1年生の夏休みだったろうか。休みを利用して、自分もばあちゃんのベッドの下に寝泊まりしながら、看病した。既に、癌細胞は骨など全身に転移し、鎮痛剤も効かなくなっていた。

「喉が締め付けられる!」「体が引き裂かれる!」「骨が砕かれそうだ!」そう言いながら、ばあちゃんはベッドの上でもがき苦しんだ。その痛みをどうすることもできない自分は、溢れ出す涙を必死にこらえながら食事が喉を通らなくなったばあちゃんの口に、吸い口で水を運び、下の世話をし続けた。

泊まり込んで4,5日経った頃だったと思う。夜中過ぎ、二人だけしかない病室で、ばあちゃんが私の手を握り、すがりつくような眼で言った。「おさむー、その引き出し開けっと果物ナイフあっから。それでばあちゃんの胸、刺してくれ。苦しくて、つらくて……。早く楽になりたい。おさむに刺してもらったら、ばあちゃん、成仏すっから」

私はとっさに「なんでそんなこと言うんだ」と怒りながら叫んだが、その後、何の言葉も発することができなくなり、堪えていた涙は、もはや止まらなくなった。でも、あんなに苦しむばあちゃんの姿も見たくない…。震える手で果物ナイフをつかみかけた。骨と皮だけに痩せ細った体を、いまだに蝕み続ける癌細胞。その闘いに終止符を打たせて、ゆっくり休ませてあげたい。そんな思いが駆け巡った。

だが、意気地の無い自分にはできなかった。ばあちゃんに背を向け、果物ナイフを見つめながら、夜が明けるまで泣き続けた。ばあちゃんは、それから1ヶ月も経たないうちに息を引き取った。（中略）

このばあちゃんとの別れは、「医者になりたい」という夢を「絶対医者になるぞという決意」に変えた。何もできずに、ばあちゃんに背を向けていた自分が腹立たしく、果物ナイフを見ながら泣き続けることしかできなかった自分が、情けなかった。

「ばあちゃん、絶対医者になっから…」葬式のとき、そう誓った。（中略）

ただ問題は、頭があまり良くなかったことだ。小学校4年生の時の成績は語呂がいいので、今でも覚えているが、4が4個で3が3個。田舎の学校では、成績がトップでも医者になることは夢のような話だった。ただ、人は夢を見続けると、しかも、それが使命感にまで発展すると、その人の本来の能力や精神力以上のものが湧き起こってくる。まず、勉強することが苦にならなくなった。何時間でも机に座り続けることができるようになったのだ。わからなかったことがわかるようになると、授業も楽しくなってくる。次第に学校の授業では満足できなくなり、参考書や問題集を買っては、片っ端から覚え、解いていった。いつの間にか、学校の授業より1年早く進むようになった。

しかし「自分は人より物覚えがわるいなあ、でも気のせいかなあ」と思っていたら、（→裏面へ）

ある日のこと、担任のI先生がクラスの前で「おさむは、先日やった知能テストで、クラスの平均点以下だ」とニコニコ笑いながら公表した。知能指数がクラスの平均以下でも学年トップになれる、ということを担当はみんなに伝え鼓舞するつもりだったのだろうが、私は「やっぱり。気のせいじゃなかったんだ。」と一時落ち込んだ。でも「仕方がない。僕には才能はないんだから、努力するしかない。」と人生の早い内に自覚できたことは、先々にとって重要だった。

IQが低いことは自覚したが、好奇心や負けん気は人一倍旺盛だった。田舎の中学校の授業に満足できなくなり、ある広告で見かけた夏期講習のチラシを見て、東京へ行きたくなった。東京の中学生がどんな勉強をしているのか、自分がどのレベルなのか確かめたくなったのだ。今から考えると、親が二つ返事でよく承諾してくれたと思う。右も左も分からぬ中学生に、高い金払って、ホテルに一人住まいさせ、予備校の夏期講習に行かせてくれた。

著書にはこの後、塾でも一目置かれる成績をとるようになったものの「東大に入ることが人生の目的じゃないだろうとあほらしく思えてしまった」との記述があります。いい成績にとって医者になることが夢でなく、病気で苦しむ人々を助けることが夢の根本だからこそ、常に世界を良くし人々を助ける活動に心が向いて、実際に成し遂げているのでしょう。生徒の皆さんは國井氏の決断、そして立たされていた状況にどう立ち向かったかについて、どのように感じたでしょうか。

國井 修 (出典：フリー百科事典『ウィキペディア Wikipedia』)

國井 修 (くにい おさむ、1962年(昭和37年)10月20日～)は、人道支援、感染症対策、母子保健、保健戦略・政策などグローバルヘルスを専門とする医師・公衆衛生専門家。これまで110か国以上で保健医療活動に従事。医学士(自治医科大学)、公衆衛生学修士(ハーバード公衆衛生大学院)、医学博士(東京大学)。グローバルファンド(世界エイズ・結核・マラリア対策基金)戦略・投資・効果局長。スイス・ジュネーブ在住。

*来歴・人物

栃木県大田原市生まれ、1981年に栃木県立宇都宮高等学校を卒業、1988年に自治医科大学卒業。大学卒業後、内科医として病院や奥日光の山間僻地で診療する傍ら、AMDAを通じてソマリア・バングラデシュ・カンボジアなどの人道支援を行い、TILL(栃木インターナショナルライフライン)を創設してその代表として在日外国人医療に従事。

1993年、長崎大学熱帯医学研修コースを受講した後、フルブライト奨学生としてハーバード公衆衛生大学院に留学。1994年、自治医科大学衛生学教室助手となる。

1995～2000年は国立国際医療センター国際医療協力局に勤務。日本政府を通じてベル・日本大使公邸人質事件、アフガニスタン・イラクなど医療復興援助、アフリカエボラ熱流行調査に関わる。

2000年以降は東京大学国際地域保健学講座専任講師、長崎大学熱帯医学研究所教授として人材育成・研究に従事し、また外務省経済協力局課長補佐として国際保健援助政策、特にG8沖縄サミット時に日本が打ち出した沖縄感染症対策イニシアティブの監理・運営に関わる。

2006年より国連職員(UNICEF)となり、ニューヨーク本部で保健戦略上級アドバイザー、ミャンマーとソマリアで子どもの死亡低減のための保健医療・栄養・水衛生事業の統括を行う。軍事政権下のミャンマーでは、サフラン革命、サイクロン・ナルギス、内戦中のソマリアでは、アフリカの角の大飢饉、コレラ等の感染症流行などの緊急事態が発生し、人道支援のクラスターアプローチ、国連組織間の調整役なども務めた。

2013年より現在まで、ジュネーブにある国際機関グローバルファンド(世界エイズ・結核・マラリア対策基金)にて、戦略・投資・効果局長として、年間200万人以上の命を奪う3大感染症(エイズ、結核、マラリア)の克服のため世界100か国以上を支援している。

國井自身が学生時代から進路に悩み、様々な助言や支援を得た経験から、日本帰国時には講演会等で国際協力を志す若者、後輩たちに助言・支援を行っている。

自治医科大学卒業。公衆衛生学修士(ハーバード公衆衛生大学院)、医学博士(東京大学)。

2020年現在、長崎大学、千葉大学、東京医科歯科大学で客員教授、東京大学、京都大学などで非常勤講師を務める。

*著書(一部)

『世界最強組織のつくり方 - 感染症と闘うグローバルファンドの挑戦』(筑摩書房、2019年)

『国家救援医 私は破綻国家の医師になった』(KADOKAWA、2014年)

『人類 vs 感染症 新型コロナウイルス 世界はどう闘っているのか』(CCCメディアハウス、2020年)